

凡上紀471末

1.996P-1/4

船を廻る長い棒

凡上紀471 P
あまの
元翔
云、
57、
あ336-45

龍宮城

棹を廻らした船は、天翔けるよう
一路
蓬山を

目指した。

二つの心は、喜びに打ち震えながら、夢見心

地のうちに海の只中を漂っていた。

恋する二人は、時のたつのも忘れて胸の内

の想いを語り、愛の言葉を交しあうのだった。

夜はもう、白々とあけようとしていた。

「お話は尽きず、本当に梨ーゆうございま

す。けれども梯僊様、少しはおやす

みにならなれば御身体によくありません

わ

こう言うと日御子は、梯僊に教えて、目を

眠らせた。(「丹後国風土記逸文」浦興子糸

参照)

米

凡土記 491' 7
凡土記 491' 7

伊勢神宮の宮中（四重の垣の内）や、平城宮城や、大宰府
の後殿域（内裏域）が、ひととき、高い位置にあるのは、
山の中の宮城の様式を伝えているのかも知れない。

成周
翟泉山
參照

神代紀 下第十段本文 第6回 入周初の名邑

あり、枝や葉が繁ってこもり、
 杜は名義抄にユヅリハの訓がある
 の木が

其の宮には、
 雉堞幅三丈、高さ一丈の牆垣と城上
 の垣が整頓っていた。(写真図版 257・348 参照)
 宮城の門の前には井戸

宮
に
至
つ
た

タクマが原の宮遷都以前の宮

是に駕籠に揺られて行くほどに
海神の

（一）丹後國屋上記逸文（浦島子糸）

く大きな鳥に至ったかと思えばかりであつた。

まゐりて、不意の暗（突然）に、海中の博

1	た
---	---

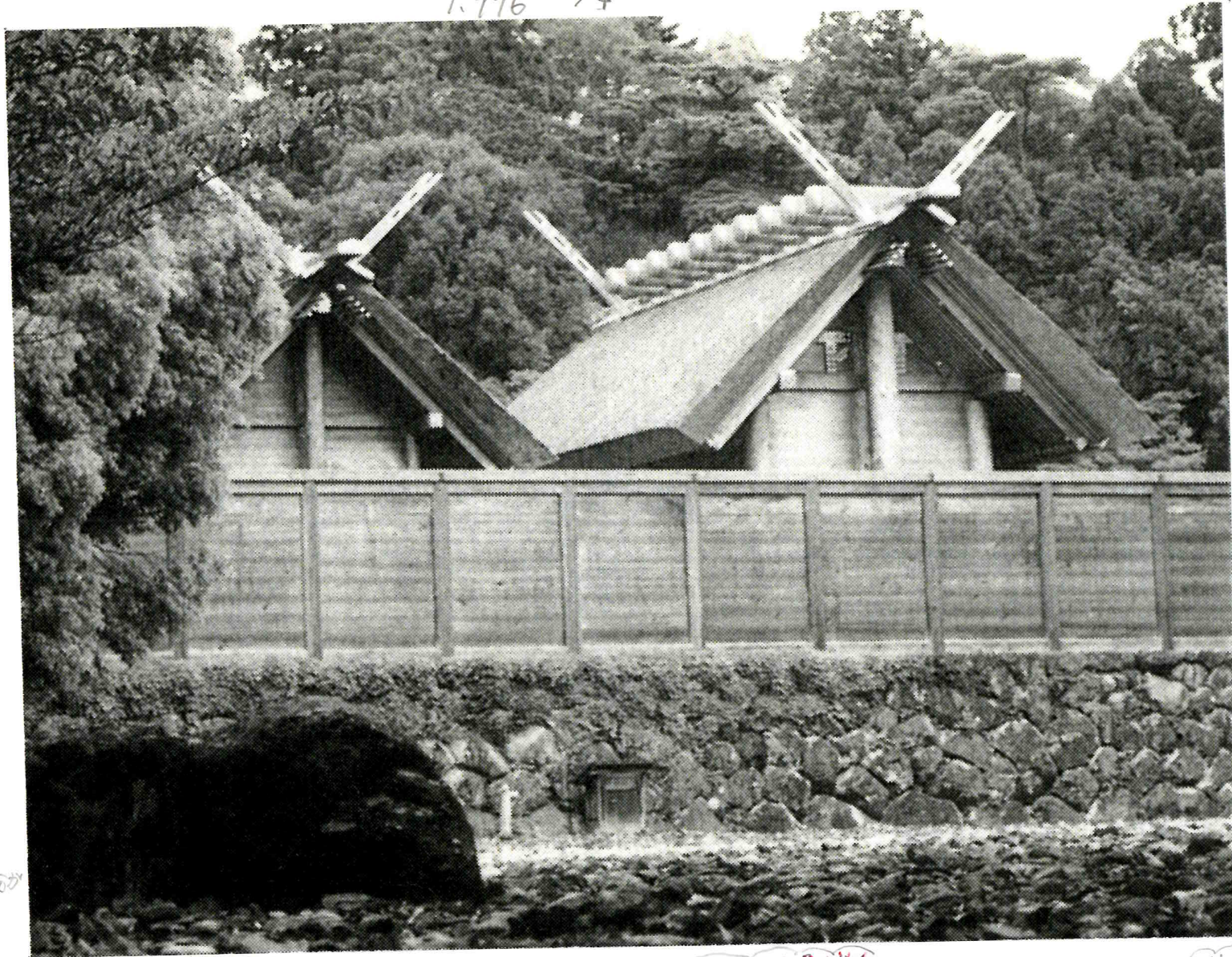
二ノ
 牙
 魚
 台
 国
 仁
 著

や
か
て
へ
二人
を
乗
せ
三
人
は
、
馬
を
同
二
台

船は、北へ北へと曹き進んでゆく。

[illegible][illegible][illegible]

1.996^P-3/4



カラー写真
「地図に載る神社とお寺」
88Pに有るが、石垣の下半分が
欠けている。
この写真を採用する

北
→西
(
西側から写す
いるように
古く正殿
古く正殿が
たかきひめがき
雑壇 64頁

神を祀り月日不明
③1728^P-4/8

記上 64頁

「はつて
正殿」にある
花井勝文 62^P末

65 64頁

1404 写真図版 348 伊勢神宮の内宮側面 (*左は西宝殿 右が御正殿)

1304

『伊勢神宮と全国「神宮」総覧』別冊歴史読本39 新人物往来社 2003年3月13日発行 63頁参照 179^P
御境内(四重の垣内)の一番外側の垣「板垣」が石垣の上に立設されている。
*雉(高垣)回堞(姫垣)の様子を伝えているのかも知れない
179^P

1.996^P 4/4

ア

かつ倭人達は、周の王朝へ度々朝貢して

いたようである。(既述) (洛陽)

多分、周の首都となった洛陽城の宮城門

の近くに、井戸、霊泉があるのだろう。(第6・7回参照)

周の都洛陽(洛陽)へ到った倭人等は、宮城門

のすぐ近くにある井戸に、興味を覚えたので

はなかろうか。

そこで倭人の都の宮城門にも、一つの井戸

が掘られたのだろう、と考えてみたい。

(*)

「五子」とある。

どうやら1570
童女 女の子
男の子 3361

1185 元
斬 $< 1007^P$
は日
元 2383^P

1,997^P - 1/3

凡±記492^P1斤~

震

たのたった。

と
言
つ
た
。

7 是の方が亀比売様の夫になるのね

て、
相
語
り

すると程なく、七たりのの豎子（童子）が来

と
い
い
、
一
一
一
一

肝
を
開
い
て
内
へ
入
る
て
い
る
左

立ち
な
て
い
下
さ
い
ま
せ
ぬ
か
L

7 梯儼様、且し（すニ一の間）此處にお

乙姫は、

きな宅の門に到った。

二人は、手を携えて、徐々に行き、一つの天

く、
耳に
聞いた
こと
も
ない
もの
であ
った
。

と
玲
龍
て
て
か
つ
て
目
に
見
た
こ
と
め
な

淹
央
く
、
専
堂
二
層
告
り
の
印
一
す
新
う
キ
力

か
け
く
ろ
／
た
か
ど
の
注
入
て
ル
カ
力

[illegible]

寺
土
カ
う
れ
て
)
の
。

[illegible]

免文
輔與
子糸
糸多
糸

氷
入
れ
て
ル
方
々
。
下
、
丹
後
国
界
二
己

か
ら
ようか見
い
和し
る
、
と
の
出
来
な
い
禁きんちやう
ハ
二
テ
は

[illegible]

さ
て、
ふたり
は、
~~奥~~
り
こ
ろ
に
い
る
の
を
見
た
ら

2059 2066
あふりハ

学研の図鑑「星・星座」29, 23P
1.997-2/3

足利時義満 1129P
独笑ひりみ 1881

八土に472

それからまた、
「是の方が、亀比売様の夫になるのね」と言った。
茲に、梯儂は、乙姫（卑彌呼）二代目神功皇后の名が、亀比売であることを知った。
梯儂は、その名にちよつとした興趣を覚え、思ひ知らず独笑を浮かべていた。
／＼亀のような頭巾をかぶっておいでになった。
た女王卑彌呼の名が、実は、亀比売であつたとは、何ともほほえましいではないか。
乙姫が来て、梯儂が、
「其の七たりの豎子は、乙姫は、昂星と名付けられた子供達でしてよ。そして其の八たりの豎子は、畢星についていますの」と言つた。
第349回 写真版 参考
なお、昂星は、牡牛座の肩部に輝く恒星（星団）のことである。
星団（プレアデス星団）のことである。

暫

電
みする
静

多数の

④ 1992^p 元64^p
天上の聖の家

元64^p 1845^p
1.997^p-3/3

スバル^p
元1202^p

元64^p 柄225^p 紐(26) 1889^p
御統 104^p 後 110^p

を紐で結んで飾りとした。御統の瓊のよう
な形をしてゐるところから日すばると呼ぶ
ようになったという。三等星・四等星が六
柄の短いスポーンのように並んでゐる。澄んだ
夜空で目のよい人ならば、もつと暗い星を含
め、十五、六個の星を数えらる。全体が青
白く、破い光かにしんだよう、実に美しい
星の群である。(「星・星座」学研の図鑑
二三・二五・二七頁。「広辞苑」へ昂参
照)

また、「畢星」は、牡牛座の目にあたる首
星「アルデバラン」付近に散在する星団へ
「アルデス星団」のことである。アルデバ
ランを一端として、四等星・五等星がV形に
ならび、牛の顔の部分を形成してゐる。(「星・星座」
学研の図鑑、二四・二七頁。「広辞苑」へ参
照)

ともあれ、倭国の宮中の「天上の聖の家」の
人々は、

太陽(天照大神・神功皇后・卑彌呼)

元64^p 110^p 105^p

六連星と云ふ

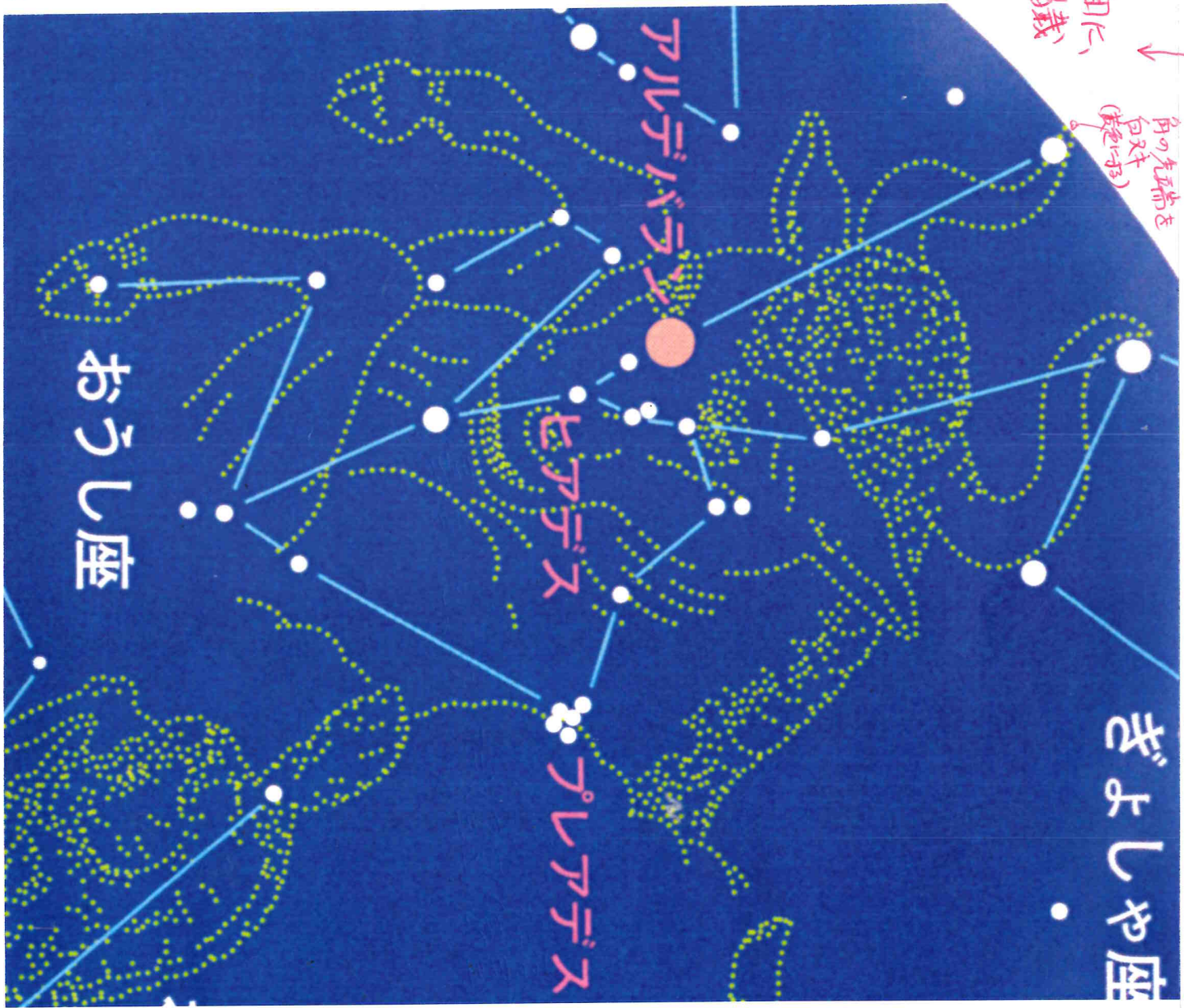
「アルデス」の字の
七人の女の子 1997^p

三角の空白をブルーにする。

角の先端を
白くす
(黄に赤)

右頁全面に、
大きく掲載
下さい。

ぎょ座をブルーにする。
(赤す)



1998^p - 1/4

1324
1424 中ふりかけ

第307図 おうし座

へおうし座は、マ。

半字マ
2月、西の空

上旬：午後9時ころ

中旬：午後8時ころ

下旬：午後7時ころ

星座図鑑 藤井旭 河出書房新社 2008年

4月30日発行 35頁参照

・左頁の上半分に
掲載下さい。

・星が暗いけれども、
出来るだけ、鮮明に
お願いします。



ゴ4
13QG 中心よりわけ
ゴ4
14QG 中心よりわけ

写真図版 349 ヒアデス星団「畢星」^{あめふり}と、プレアデス星団「昴星」^{すばる}（昴）^{すばる}

『星座・天体観察図鑑』^{ふじり}藤井旭^{あきら}、成美堂出版、2002年12月10日発行、107頁参照。

- 12
QG
ゴ4
- ・左端の^{ゴ4}V字形に密集した星の集まりがヒアデス星団で、赤い1等星アルデバランが含まれ、これが^{おう}牡牛の^め眼とされている。
 - ・右端がプレアデス星団で、日本名は^{すばる}「昴星」^{すばる}（昴）。

左頁の下半分に掲載下さい。

1,998^p-3/4

14 QG コマ 中心よりかけ

ヒアデス星団とアルデバラン
東隣りの狩人オリオン座に挑み

かかっているかのような牡牛座の
顔の部分に V 字開きのヒアデス

星団は有る。

• その中でも特に強く輝く赤い一等
星アルデバランが血走っている目を
表わす。

• もっともアルデバランは距離65光年
のところにあり、距離151光年のヒア
デス星団よりもずっと近くに位置して

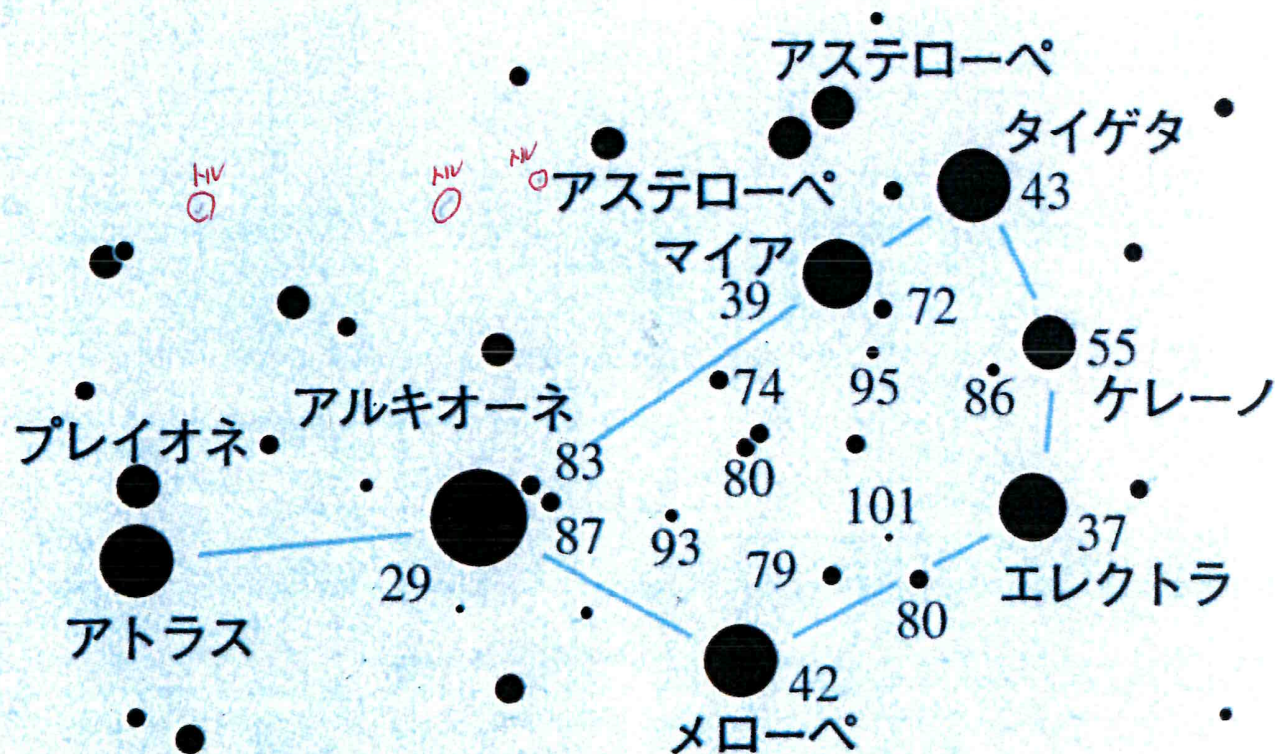
いる。

つまり、両者が偶然重なって
見えているわけである。

13 QG

12 QG

186^p



(数字は光度、43は4.3等)

14 QG コマ 中心よりかけ

第308図 ヒアデス星団(昴)の星の光度

『星座図鑑』藤井旭 河出書房新社 2008年4月30日発行 34頁参照

• 牡牛の肩先に6~7個の星が溜まって輝く昴は肉眼でもよくわかる。

• 双眼鏡で見るともっとたくさんの星が見える。

• 清々納言は『枕草子』(239段)において「星はすばる。……」とその美しさをたたえた。

① 1992¹

「梯子様と夫婦になりた
い言葉を尽くして、許しを請
い願った。」

月（月読尊）
 天（天照大神）
 風（風神）
 雲（雲神）
 昂星（昂星）
 畢星（畢星）
 天体・氣象等々の自然の名で
 呼ばれてゐたようであり、興味深い。

乙姫は、
 梯子様、
 と言ひ、前立って引導き、門の内へ入つ
 て、
 太廟の前に到つた。

とき、乙姫の父母は、共に二人を相迎え
 挨拶の礼拝をして、定め座につくと、坐定
 した。

乙姫は、
 人間と仙都

（死後の世界、常夜か）との別があつて思ふ

にまかせない、とを稱説き、神なる父母と偶

に會えた喜びを談議し、
 一途に

560.130 ㊦

広辞苑 286 ㊦

1,999^P

11月4日

2060-1/2

OK

晴やか 1831^P
20夏13

ついに、晴やかな結婚の披露宴が執り行なわれ
る。こととなった。
すなわち、百品の芳しき味が薦められ、兄弟姉
妹等は杯を擧げて献酬し、隣の里の幼女等も
紅を除いた顔をして戯れ接するのだ。また
常世の音楽は澄みとおって響き、神の舞はう
ねうねと進んで、其の歡宴の華麗でおもいろ
いことは、人間の万倍ほどもあろうかと思わ
れた。そんなにも珍らしく、おもいろい宴
の故に、時の経つのを忘るゝ日が暮れていく
のにも気がつかないほどであった。
但、黄昏の頃となった時、宴会に列席して
いた群仙侶等は、次第次第に退散してゆき、
やかて、そこには、乙姫と梯儼の
二人だけが留まつてゐるだけ、となつていた。
「梯儼様。私ハ、あなた様を、どんな
なにお慕ひ申し上げておりますか。あ
あ梯儼様。私、嬉しゅうございます。
「阿亀殿(云辞苑参照)。私も貴女が好きです。好き
になつてはならない方を、二人なにも好
まになるなんて、私自身が信じられないくら

世人に人
他人 2000-3 13
山東省 (仙人のふるさと)
「鬼の城」→ 463.0
菊池 268P
月工472

2,000P

前頁138

小町さしかりと抱き締め、223のち

前頁168

いす。心の内に燃え盛る恋の炎は、空まで
も焦がすかと思はかりに大きく燃え上がつて
しまつて、もう抑止めようもないほど
私はあなたのことを、たまらないほど
狂おしいばかりに、愛してしまひました
梯偶はその胸の内に、乙姫を確りと抱
き締めた。
「梯偶様・・・」
日御子の唇から呻くような声がかれて、
梯偶の身体が日御子の上にかぶさつた。
吐く息も熱く、二人は恍惚とした妖
い幻想の世界に漂つた。
「ああ・・・」
愛する者に体を与える女の悦びが、その声
の中にあつた。こうして、互いに愛し合ふ二
人は、肩を雙べ、袖を挽え、夫婦之理を成した
のだつた。(丹後国風土記逸文、浦嶋子条参
照)

*

次の日、梯儼は
 蓬萊の島の女王の夫になつたのだから
 ちよつとくうい、空を飛べるようになる
 といふ不思議でなかつた
 と心の内に嘆き、弾む思ひで飛びあかつて
 みた。
 しかしてどうしたわけか、梯儼の足が地面
 を翫あそんだ途端、その足は地上に降り立つて
 まつていた。
 「あれ、おかしいな」
 梯儼は首をひねつた。
 「そうだ、鳥のように両手を広げ、羽搏はたい
 てみよう」
 だが、どんなに試してみても、踏台ふみだいから空
 中へ勢いきりよく飛びあがってみても、結果は
 同じだつた。
 だいいち下

へ自分の身体が軽くなった✓

ようには、とても感じられなかった。

「大空を飛び回るには、もつと時間がかか

るのかも知れないな」

梯儂は、自らの心を納得させるかのよう

に、独り言して、苦笑した。

＊

「あら梯儂様、何をなさっておいでな

すか」

「あ、亀比売様か。私が仙人になるのは、何

時のことであらうかな。あの雲に乗ってみた

いのだよ」

「亀比売は、雲の上に乗りたい」という夫

の言葉を聞いて、大層驚き、一瞬絶句し

たが、然りげなくこう言った。

「まあ、梯儂様は、雲の上に昇りたいとお

大カマ
1066^p

カマ 1537^p

2,000^p - 4/

大カマ
1538^p
③ 3661^{p-2/2}

考えなのですか。そうね。それは、ま
だまだおい分先^{かんさき}ですわし
「ソウか。ふむ。そうであらうな」
梯^い僦^いは、領^{りやう}きなから言った。
*
④ 因^{いん}みに述^のべると
① 「登^{とう}殿^{でん}」はるかな所^{ところ}へ登^{のぼ}る意^いにて「天子^{てんし}」
の箱^{はう}御^ぎを申^{もう}し奉^{ほう}る語^ご。列^{れつ}子^し「帝^{てい}登^{とう}殿^{でん}」(「大
字典」上田万年^{うへだ ねん}、講談社^{こうだんしゃ}、昭和六十年十一
月十日(二十三刷)発行、一五三八頁参^{さん}
照)
② 「登^{とう}仙^{せん}」^{はるかな}上天^{じやうてん}(昇^{しょう}天^{てん})「て仙人^{せんじん}になる
こと」(「貴人^{きじん}の死去^{しきよ}の敬称^{けいしやう}」(「大字典」
上田万年^{うへだ ねん}「一五三七頁参照」)
③ 「昇^{しょう}天^{てん}」^{はるかな}(一)天^{てん}にのぼること(二)人の死^しにも
云^いう。後漢書^{こうかんしよ}「遂^{すい}上^{じやう}昇^{しょう}天^{てん}」(「大字典」
上田万年^{うへだ ねん}「一〇六六頁参照」)
なるといふ言葉がある。

H31(2019)1.17(木)~

群書類
小町集
517頁下

群「小町集」
アキ 第2版193
OK

2,000P-5/5

アキ 3661P-3/2

575613

あ914236
紀上340第5号

下1/17
1/17

とある、

ベキ

このよにな

思ふことなき

みとはなる

とあり、

「連狭騰（天に騰る）とは、死するの意味」

である

という。（「日本書紀」上）日本古典文学大系

岩波書店、三四〇頁、六一三頁補注九一―一四

参照

③ さらに

① 法隆寺の「釈迦三尊像」光背銘に「登遐」

とある。（「法隆寺」町田甲一「時事通信」

社、昭和六十二年十一月十日発行、六五頁参照

② 群書類従本「小町集」第68番歌に、

倭王

使に因つて上表し、

詔恩を答謝す

二人は幸せであつた。

夢と現との場も定かならないほどであつた。

打ち過ぎていった。

阿亀や

日御子の夫

梯儂は

突然にも

こんな言葉

魏国から遣わされた使者として

の任務を帯びてこ

で暮していること

がな

せめて、これまでに認めておいた見聞録を

魏国の朝廷へ届けて、報告の務めを果した

ことに

随行して来た供の者達に持たせて、魏国へ送

り届けてやっておくれでないかい

「まあ、そのようなことで、貴方様の御心

は悩んでおいでだったのでございますか。早

くおっーやつて下さればよろしかったのに。

そういうわけでしたら、私、魏国の天子様に

取り敢えず

194

1878
所存 1122^p

(2)

花の宴の後で暖かくして
紀下 192^p

2,001^p - 2/3

1878
上表 1107^p
宛

1514^p
体裁

筆をまけ
1952^p

2193^p
21629^p
反り

あてて御挨拶の御手紙を書きとに致します。
ゆ。そうして、魏国の天子様の許へ私の上
表文と梯僊様の書状とか、確実に届くよう
取り計らいのことになりました。まいよう
こういうと、日御子は、一心に筆を走らせ
た。だ。た。
も。つ。と。も。その上表文(天子に宛てた文書)の
体裁等々の細かい部分については、中国朝
廷内の儀礼に通じた梯僊に尋ねながら、書き
進めていったのかも知れない。
尚、倭国の女王卑彌呼が、魏国の皇帝に書
き送ったというその上表文には、
「東海の倭王が、一つしんで中国の皇帝に
申し上げます。お使いの建忠校尉梯僊等がま
いりまして、多年にわたる思いがいちどに解
けました。時節もかなり暖かくなつてまいり
ました。か、あなた様はいかにお過ごし
でしょうか。御平穩のことと存じます。私も変
りございしません。意をつくしませんか、謹ん
で申し上げます。なお、正式には追つて使者
を遣わし、御礼を申し上げる所存で御座るま

ある 汲 49
こと

2,001^P - 3/3

12F43 12F43

すし
と いった趣旨の文言が いるさかい いたのでは
な かううか。(推古紀十六年九月条参照)
① 倭国の女王卑彌呼が 魏国の天子宛に書き
つた 上表文
② 梯儁が 倭国について有るが儘を記述した
の二通が 梯儁とともにやつてき
て 倭国内に滞在している 使者達 (梯儁に
随行してきた者達) に 手渡された、と想像さ
れる。
強い。 言うた も 無く ころ 書く と、 おい 分 奇妙な 感 かん
の 正始元年(二四〇)条には、 次のように 記
され ている。
「正始元年、 太守 弓 建中 校尉 梯儁等 造
詔書・ 印綬を奉いて、 倭国に詣り」

こと

こと

倭王に拝假し、牛ひに詔を齎し、金帛・錦
厨・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因つて
上表し、詔恩を答謝すし
とある。(既述)
・つまり、
「倭王(卑彌呼)使に因つて上表し、詔
恩を答謝すし
と書きしるされてゐる。
ここに述べられてゐる「使」は「
魏国の帯方郡太守弓遵が遣わした「使者」
と判断に迷う。
「使に因つて上表した」という表現だけで
は、「(イ)・(ロ)どちらの「使」なのか不明瞭だからである。
「けれども」正始元年(二四〇)条中に
(イ)「使者」の名前が全く記されていない。
(ロ)「任官および銀印青綬の授与の記載も無い」
と、
「他」と比べて「特異である」
といった点を考え合わせると「

(ニ)

1500 2001-3/3 2002-3/5

前頁 2へ3行

13.5

後王卑彌呼の使者が、洛陽の都へ赴いて上
表し、詔恩を答謝したとは考えにくい

ように思われる。

明言できないものの、この物語では、

「後王卑彌呼が、梯僦に随行してきた」使者

に因って上表し、詔恩を答謝したのだろ

う

と解釈してみたい。

*

ところ

①卑彌呼から魏の天子へ宛てた「上表文」

②梯僦が記録した「見聞録」

の二つの書簡が、使者に「梯僦に付き従っ

て来朝した者達」に手渡され、直前の頃の

ことであつたろうか。

住吉の口魏の館内は、駭然となつていた

仕度 979^元 1657^元 先帝 1271^元 小野小町 265^元 3/5
 内親王 11林川 2,002-
 坂崎 523^元 1118^元 仰天 574^元 1998-1/1
 先代 1270^元 宅比売 1998-1/1

梯儀様は、禁中の人になられたそうです。
 梯儀殿は、遙か南の設馬国へ下って行か
 れる途中、突然にも邪馬台国へ舞い戻っ
 ておいでになり、先代の倭王の娘と夫婦にな
 った。禁裏の奥深くへ入ってしまわれた。
 事という噂が、梯儀の従者とて来倭していた
 使者達を仰天させ、大いに慌てさせた。
 「梯儀殿は、何というお方であらう。御自
 身の職分もわきまえず、女達の機嫌とりばか
 りに身を費して、ついには唯一人、遠い南の
 国の女のもとへ行かされた。まじになつたと思
 ったら、今度はこともあううに、倭国の
 先帝の娘の婿となつてしまわれた。
 「さうですとも。梯儀殿が金々何を考えて
 おられるのか、さっぱり分かりません。
 「さかーそわにても、我々は、任務さえ
 為し遂げ得ないで、どうしておめおめ帰国
 することか出来まいようか。」
 「本当に、そんなことになつたものだ。」
 伊邪国（宇佐国）へ向う旅仕度の最中

H10.7.30

2.002^P-4/5

2115^P 呈上 1515^P 2002^P-3/4
西月 2179^P

たつた従者達は、驚きを隠さず、動揺した。

と、そんなとき、

①魏国の天子宛の倭国の女王卑彌呼の上表

文と、

②梯儻が「たためた見聞録」と、

の二つの文書が届けられた。

魏国の天子に呈上すべき「国書」と「報告

書」とを得た使者達は、身の面目が保たれる

ことを喜んだ。

ともあれ

ここに使者たちは、二つの書簡を携え、あ

ふたと海を渡って帰っていった。

倭人等が使者達を帯方郡へ送り返したの

であらうが、二通の書状がどのようなにして洛陽の

都へ届けられたのか、等といった詳細については分からない

＊先述の通り、魏志倭人伝にはごく簡単に、

「倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝

す

と記されているのみである。

米なるほど、正始元年（二四〇年）条に

H30(2018)5,18(4) ~ 5.20(4回)
 令和元(2019)6.22(土) ~ 6.23(3回)
 令和2(2020)1.31(金) ~ 2.2(3回)
 令和2(2020)10.14(水) ~ 1.16(4回)

2,002^P - 5/5

1/16 IF 1/15
 10/15

「倭王、使に因つて上表し、云々」
 と記されてゐるものの、
 では、三年後の正始四年(二四三年)に
 へ大夫伊敷耆掾邪狗が、卑彌呼の正式な上
 表文を奉じて洛陽城へ赴き、三年前の口詔書
 印綬等の下賜について、厚く詔恩を答謝し
 たのであろう。
 と解釈したい。(既述)